

建築評論 単行本収録作を起点に



[左から]

『ことばのない思考——事物・空間・映像についての覚え書』(田畑書店、1972) / 『建築・夢の軌跡』(青土社、1998) / 『進歩とカタストロフィ——モダニズム 夢の百年』(青土社、2005)

建てることと住むことをつなぐ回路の探求

安森亮雄

建てることと住むこと

多木浩二は1960年代から建築評論を始め、晩年に至るまで40余年にわたりその作業は続けられた。主に雑誌で発表されたそれらの文章は何度か単行本にまとめられており、そのように再録され、場合によって改訂された評論は、何らかの重要性をもって位置づけられたものと考えられる。本稿の限られた誌面で多木の膨大な業績を網羅することは困難だが、ここでは、それらの比較的多くの読者に読まれた建築評論を中心に論じていきたい。

多木の建築評論に通底する思想を捉えるには、個別の言説を見る前に、まず、多木が建築作品を批評する際の姿勢を確認しておく必要がある。それには、建築家の手によらない無名の建築を論じた『生きられた家』(初版1976)の冒頭を見ればよい。

この俗なる家と建築家の作品のあいだには埋めがたい裂け目がある。[...] 建築家がつくりだす空間は現実に生きられた時間の結果ではないし、一方、生きられた家は現在の行きつく果てをあらかじめ読みとって構成されるわけではないからである。それらはおそらく空間のテキストのふたつの極、詩的言語とコード化された言語というふたつの極を示しているにちがいない。その対立と相関のあいだに、われわれの空間についての思考のすべて、空間言語の多様さの一切が生じ、関係しあっている。[*1]

ここで述べられているように、多木が批評を展開した「建築家の作品」は、普通の人が生活し経験する「生きられた家」と常に対置されていた。この対立は、「知的創造／普通の人間の生活」[*2]、「ロジック／レーベン」[*3]などと言葉を変えながら反復される問題意識であり、「建てること、住むこと、考えること」(ハイデッガー、1951年講演)の関係が近代になって分離したことを背景としている。注意したいのは、両者は相交わらないものと捉えられがちであるが、多木は、対立するだけでなく相互に関係するとしており、「このような人間が本質を実現する『場所』をあらかじめつくりだす意志にこそ建築家の存在意義を認めな

なければならない」[*4]と述べていることである。それから20余年を経て建築評論をまとめた『建築・夢の軌跡』(1998)でも、現代では、「現象学的経験を無視せず、生きられた世界から建築家は思考を引き出さねばならなくなった」[*2]と明言している。このように多木は、「建てること」に関わる創造の論理と「住むこと」を通じた経験について、両者の分離を認めつつ、それらをつなぐ回路を探求していたと考えられる。以下では、この回路を仮説として、大きく3つの時期にわけて代表的な建築評論を検証していきたい。

芸術としての建築

建築評論を始めた1960年代に多木が最初に注目したのは、篠原一男と磯崎新という2人の建築家であった。1972年にまとめられた『ことばのない思考』では、両者のために「ふたりの建築家」という章を設けている。彼らに対する関心は共通している。この時代を教科書的に振り返れば、東京オリンピック(1964)や大阪万博(1970)などの国家プロジェクトを背景に、丹下健三やメタボリズム・グループが活躍する一方で、パリで起こった学生運動(1968)が日本に飛び火し、社会情勢が流動化していた。そうした中、技術、コミュニティ、国家、未来といった、建築にとっての「外在性の論理」[*5]が崩壊しつつあった空気をいち早く捉え、個人の知覚に基づく空間に表現を求めたのが、この2人の建築家であった。

同書に収められた「篠原一男についての覚え書——『花山の家』まで」[*6]では、《から傘の家》(1961)から《白の家》(1966)、《花山南の家》(1968)に至る初期の篠原作品が取り上げられている。そこで多木は、合理主義に基づく社会構築の手段として建築を考える当時の潮流に対して、篠原の住宅に「非合理性も含めたひとりの人間の『生』の具体性からはじまって普遍的な価値にいたる空間」の意味を見出す。また、「虚像の行方——磯崎新論」[*7]では、《N邸》(1964)や《大分県立図書館》(1966)を世に出した磯崎について、「世界とかれ自身が直接かかわりあう地点——たとえば知覚から、可能なかぎり緻密に意識化された論理をひろげている」とし、その空間を「経験に従って構造化される。いいかえれば構成原理としての肉体の復権」と評している。美術と哲学の世界からやってきて建築評論を始めた多木は、当時の建築が民衆のため社会のために「建てること」に邁進する中で忘れていた、個人の生命を受け止める空間とそこで経験される「住むこと」の本質に着目し、そこに立ち返って「建てること」を位置づけ直そうとする彼らを見出したのである。しかしそれゆえ、これらの建築は、後年多木が回想するように、「ほかの芸術同様に、現代の社会文化に対するラジカルな批評」[*8]であり、社会と切断されることにもなった。人間の生命の本質を抽出しながら社会に対して批評を成立させるこのメカニズムを芸術と言うならば、ここでの多木の批評は「芸術としての建築」を位置づける作業であったと言える。

形式の分析

個人の生命の本質を受け止める「芸術としての建築」を論じた多木は、建築作品の読解を深めていく。1976年からその翌年まで『新建築』誌に5回にわたり連載された「建築のレ

トリック」は、いち早く吸収した記号論をもとに展開された建築作品の分析である。多木は生前この連載を単行本に収録していないが、遺稿集『視線とテキスト』(青土社、2013)には収められ、代表的な建築評論のひとつと言える。

初回の『形式』の概念——建築と意味の問題——は、『新建築』1976年11月号の巻頭論文として掲載され、そこで論じられている伊東豊雄の《中野本町の家》(1976)と坂本一成の《代田の町家》(1976)も同じ号で発表された。また、それらの住宅を多木が撮影した写真も掲載されており、2つの住宅と多木の論文は相互に補完しあう表現となっている。ここで多木が行っている作業は、多木自身の言葉を借りれば、「できあがった建築の形式、つまり物や空間の結合組織を分析することによって、その形式を、それをうみだした『地』としての思考のなかへひらくこと」である。建築家を書いた文章やインタビューの発言ではなく、建築の形式から建築家の思考を読み取るのである。これによって、建築家の中でまだ言葉になっていない方法や、意識に上っていない意味すらも、多木を通して言語化されることになる。建築家にとって、これが次の創作につながる役割を果たしたことは想像に難くない。

具体的に見てみよう。多木はここで、ロラン・バルトの記号論や、ヤコブソンの文化表現の分類を背景にしながら、パラダイグム(要素の選択)とシンタグム(要素の統合)という言語の2つの軸に沿って、坂本と伊東の住宅を対比的に分析している。まず、《代田の町家》について、「坂本の関心は、さしあたり、建築をまったくちがった構成におくことではなく、あたりまえの構成材の関係である」と述べている。坂本の探求は、大理石の床、白ペンキが塗られた緑甲板の壁、屋根の勾配といった構成材の選択(パラダイグムの軸)に現れる。そこに「意味の排除」という消費社会への批評を読み取るとともに、それらの構成材が天井の高さや壁のプロポーションにより関係づけられることで、「ある種の親近性」や「身体空間」が形成されるとする。そしてこうした総体によって、「空間のゼロ度に、ものがあらわれてきてあたらしい日のように存在しはじめる世界」が成立することを指摘する。これに対して、《中野本町の家》における馬蹄形の平面は、「これまでの平面計画が成立つ論理的なマトリックスの変化」すなわち「トポスの変化」であると述べる。その中で、直角の壁、円形のテーブル、蛍光灯の線といった幾何学的な形態が統合されることで(シンタグムの軸)、「ひびきあう集合論的空間」による「感覚的な世界」が成立すると指摘する。こうして、形式の分析を通して2人の建築家の方法の違いが見事に言い当てられ、それぞれの方法によって生成する空間の意味が論じられる。言い換えれば、建築家が設計に用いた「建てること」のロジックの分析から、建築家が思考した「住むこと」の意味が抽出される。2人の建築家は、その後、集合住宅や公共建築などの都市的な建築を手がけるようになるが、そこでの展開もまるで予見されているようである。

こうした形式分析が行き着くのが、1983年にイェール大学の建築雑誌のために篠原一男について書いた「幾何学的想像力と繊細な精神」[*9]である。篠原の住宅が二項対立という形式のもとにダイアグラムを添えて解剖され、そこから篠原の思考が立ち上がっていく様子は、形式分析による建築評論の到達点と言えるだろう。また、こうした建築作品の形式の

読解が、『生きられた家』における経験の世界の著述と同時期に行われていたことも、多木の思想の振幅を示している。

社会における建築

形式分析による建築の意味の読解を深めた多木は、徐々に、建築家の活動や建築作品を広範な都市や社会の中で捉えるようになる。こうした姿勢と軌を一にして、言説の対象は広がりを見せ、芸術、文化、社会などに関して多くの論文や単行本を發表していく。その一方で「私が建築に持つ関心と、建築家が建築について抱く思想とは、必ずしも重なってこないことがよくわかってきました。[...] あえて言いますと、個別の建築家あるいは建築がいいか悪いかはたいして問題でなくなった」[*10] という発言が示すように、多木の活動の中で建築評論の比重は小さくなっていく。

そうした中で晩年のまとまった評論となるのが、2001年から雑誌『ユリイカ』に連載された「空間の思考」であり、その多くが20世紀という時代の考察を通してまとめられた『進歩とカタストロフィ』(2005)である。そこでは、建築を「建てること」の意味がより広い社会の中で捉えられるようになっていく。例えば伊東豊雄の《せんだいメディアテーク》(2001)について、「私はまず自分がこれまでに書いた『せんだいメディアテーク』論をまず誤解に基づくものとして捨て去ることから始めねばならない」とする。その上で、公共建築を作っていく過程で、「形式(表現)を認識した上で、建築は建築家だけが考えることでは完結しないものであることが見えてくるのではなからうか」と述べ、建築の社会性に言及する[*11]。また、山本理顕の《埼玉県立大学》(1999)を取り上げ、「ここには一人の建築家の企みや野心を超えて建築が存在し、建築とともにそこに風景が生まれていた」と述べ、その風景を生み出す架構のシステムを通して「失われたと出てきた共同性」に言及する[*12]。こうした認識の変化は、多木が論じてきた建築家が設計対象を住宅から公共建築に展開したことも並行しており、もはや多木の「空間の思考」は、建築家の内面に留まらず、建築に関わる具体的な他者を含めた共同性や社会の中で把握すべきものになっていく。多木は建築の意味の読解を続けながら、「建てること」と「住むこと」の座標を建築を取り巻く社会の中に置くようになっていくのである。

思考としての建築をこえて

こうして多木の建築評論は、建築家の営みに個人の人間の生を受けとめる芸術を見出し、また形式の分析から建築家本人さえまだ言葉にしていなかった建築の意味を抽出し、その先に建築を社会の中で捉えるようになった。そこには形を変えながら「建てること」と「住むこと」をつなぐ回路が通底していた。最後に私たちは、多木が建築作品から読み取った思考の枠組みと、私たちが展開すべき可能性を見定めなければならない。

まず、多木が問題にしたのは「現実としての建築」の向こうにある「思考としての建築」であったということである。多木の言葉によれば、「私の意識・無意識のなかで立ち上った

てくるものは実体的な建築ではなく、それらを立ち上げている思考や無意識の衝動なのである」[*2]。それは、これまでの日本の建築家の「個人を社会化するのではなく、社会を個人的な想像力でとらえる傾向」[*13]とも連動しており、言い換えれば、社会に対する批評としての建築を前提としていた。また、そのようにして建築を読み解き、建築家の思考を理解する作業は、多木が「その理解から本来、線状の言語しか持っていない私自身が、自己の哲学のなかに空間的思考を取り込むのである」[*2]と述べているように、多木自身の思考の形成と不可分であった。つまり、ここまで見てきた「建てること」と「住むこと」の読解は、多木自身が「考えること」の基盤となっていたのである。

多木の建築評論は、このような枠組みを前提としながら、晩年はより広い社会の中で、「建築家の作品」も「生きられた家」も同一の地平で捉えるような視野を用意しつつあったように思える。私たちは、グローバル化、情報化され、高度に構築された社会システムが大災害によって襲われることもある現代において、人が生活し経験を重ねて「住むこと」と、知的な創造として「建てること」の関係を、もう一度見直さなければならない局面に立っている。多木は震災が起きた1ヶ月後に亡くなり、今となってはその思考の行き先を知るべくもない。しかし、いま多木が建築から紡ぎ出した言葉を読むこととは、この回路を開かれた可能性のテキストとして捉え、「思考としての建築」の先にある私たちの実践の問題として読むことであるべきではないだろうか。(建築家、1972年生まれ)

[*1] 『生きられた家——経験と象徴』岩波現代文庫、2001、pp.6-7

[*2] 「建築の思考——はじめに」『建築・夢の軌跡』青土社、1998

[*3] 「形式とプログラム」『世界の建築家シリーズ10選』ITSUKO HASEGAWA・長谷川逸子』メイセイ出版、1997

[*4] 前掲『生きられた家——経験と象徴』p.13

[*5] 「異端の空間——篠原一男論」『新建築』1968.07(収録:『建築家・篠原一男——幾何学的想像力』青土社、2007)

[*6] 初出:『篠原一男の世界』『デザイン』1969.04(収録:『視線とテキスト——多木浩二遺稿集』多木浩二追悼記念出版編集委員会編、青土社、2013)

[*7] 初出:『磯崎新論——虚像の行方』『デザイン批評』8号1969.01

[*8] インタビュー「批評とは何か」聞き手=五十嵐太郎、『建築雑誌』2004.09

[*9] 初出:「Oppositions: the intrinsic structure of Kazuo Shinohara's work」『Perspecta』No.20、1983.06。日本語版:「主題の変遷と基本的構造——篠原一男論・序説」『建築文化』1988.10、その後「幾何学的想像力と繊細な精神」として前掲『建築・夢の軌跡』および『建築家・篠原一男』に収録。

[*10] インタビュー「建築の可能性に向けて」聞き手=編集部、『GA JAPAN』5号1993.10

[*11] 「建築が変わるとき——伊東豊雄」『進歩とカタストロフィ——モダニズム 夢の百年』青土社、2005

[*12] 「そこに風景があった——山本理顕『埼玉県立大学』について」『ユリイカ』2001.10(収録:前掲『進歩とカタストロフィ』)

[*13] 「不可能な都市に生きる夢」、前掲『建築・夢の軌跡』(日本語版初出:「開かれたテキストに向かって——伊東豊雄論」『建築文化』1991.12、収録:前掲『視線とテキスト』)